



TITLE:

後腹膜黄色肉芽腫の1例

AUTHOR(S):

宮口, 大志; 松尾, 学; 與儀, 安男; 神田, 滋; 山下, 修史;
金武, 洋; 齊藤, 泰

CITATION:

宮口, 大志 ...[et al]. 後腹膜黄色肉芽腫の1例. 泌尿器科紀要 1994, 40(5): 407-410

ISSUE DATE:

1994-05

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/115268>

RIGHT:

後腹膜黄色肉芽腫の1例

長崎大学医学部泌尿器科学教室 (主任: 斉藤 泰教授)

宮口 大志, 松尾 学, 與儀 安男, 神田 滋
山下 修史, 金武 洋, 斉藤 泰

RETROPERITONEAL XANTHOGRANULOMA: A CASE REPORT

Taishi Miyaguchi, Manabu Matsuo, Yasuo Yogi,
Shigeru Kanda, Syuji Yamashita,
Hiroshi Kanetake and Yutaka Saito

From the Department of Urology, Nagasaki University School of Medicine

A 48-year-old man was admitted to our hospital for lumbago. Computerized tomographic (CT) scan, aortography and venacavography indicated a solid retroperitoneal tumor at the right renal hilus. The tumor was removed and right nephrectomy was conducted. Some of the tumor remained owing to strong adhesion to the inferior vena cava and lumbar spine. Histological diagnosis of the resected tumor was retroperitoneal xanthogranuloma. One year after surgery, the CT scan revealed a gradual decrease in size of the remaining retroperitoneal mass.

(Acta Urol. Jpn. 40: 407-410, 1994)

Key words: Retroperitoneal tumor, Xanthogranuloma

緒 言

後腹膜黄色肉芽腫は本邦において現在までに25例と稀な疾患である。今回われわれは右腎内側から下大静脈背側に発生し、術後残存腫瘍が無治療にて縮小傾向にある黄色肉芽腫の1例を経験したので、若干の文献的考察を加えて報告する。

症 例

患者: 48歳, 男性

主訴: 右腰痛

家族歴: 母親に高血圧

既往歴: 19歳時結核, 40歳時胃潰瘍, 43歳時より高血圧にて治療中

現病歴: 1992年1月頃より右腰痛出現, 近医にて同年2月26日, CTを施行したところ, 右腎内側より下大静脈背側に広がる径約4cmの腫瘍を指摘された。右後腹膜腫瘍の疑いで当科受診。同年8月4日, 腫瘍摘出目的で当科入院となった。

入院時現症: 体格・栄養は中等度。血圧 155/88 mmHg, 脈拍 76/min, 胸腹部身体所見に異常を認めない。

入院時検査所見: 一般検血: 異常なし。血液生化学:

総蛋白が 5.8 g/dl と低値 (α_1 -G 3.8%, α_2 -G 10.1%), ムコ蛋白が 171 mg/dl と高値を示した以外とくに異常は認められなかった。

検尿: 異常なし。尿細胞診: 陰性。

その他: 腫瘍マーカー (AFP, CEA, CA19-9) 基準値以下, CRP 1.22, 直接レニン 13.4 Pg/ml, 血沈 1時間値 19 mm, 2時間値 52 mm。

X線学的検査: DIP では明らかな異常を認めず, CTにて右腎内側から下大静脈にかけて径約4cmの腫瘍が認められた (Fig. 1)。腎動脈造影にて右腎動脈本幹に腫瘍による狭窄が認められた (Fig. 2)。下大静脈造影では腫瘍により内後方から著明に圧排されていたが、辺縁は滑らかで明らかな浸潤は認められなかった。

以上より腫瘍は腎外性であるが右腎に浸潤している可能性が大きく、後腹膜肉腫が最も疑われ1992年9月9日手術を施行した。

手術所見: 腹部正中切開にて経腹膜的に後腹膜腔に達した。病変部は右腎上内側から右副腎、腰椎、下大静脈に至る硬い結合組織として存在し、明らかな腫瘍を認めず、下大静脈および椎体周囲との癒着が強固であり右腎およびその周辺の病変部位を可及的に切除し、一部分は下大静脈の下に残存して手術を終了せざるを

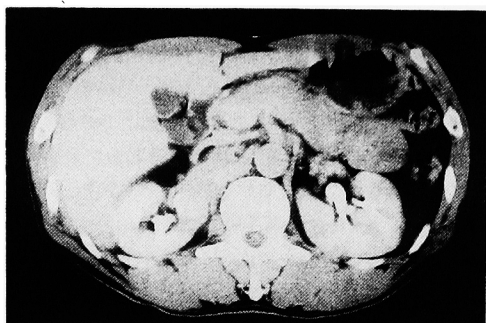


Fig. 1. CT scan shows a retroperitoneal tumor at the right renal hilus.

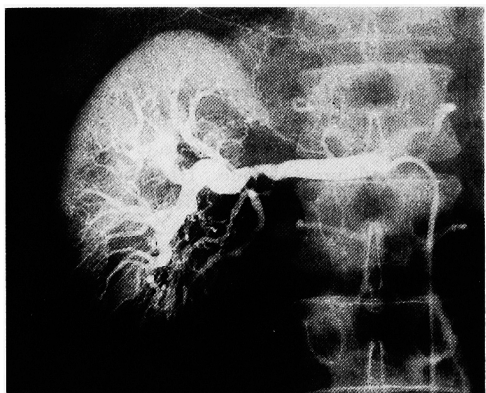


Fig. 2. Selective right renal angiography shows the stenosis of right renal artery caused by the tumor.

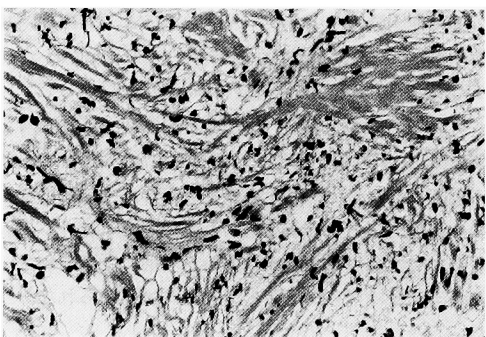


Fig. 3. Microscopic examination in H.E. stain ($\times 200$).

えなかった。

病理組織学的所見：病変の主体は明るい胞体のやや大きい細胞でいわゆる foam cell であり小さい濃染核を有している。また肉芽様の線維組織の増殖が認められた (Fig. 3)。

術後経過は良好で、腰痛はしだいに軽快、血圧も降圧剤なしで安定、11ヵ月後の現在残存した肉芽腫は特

に治療もせず縮小しつつある。

考 察

後腹膜黄色肉芽腫は、1935年 Oberling¹⁾ によって最初に報告され、本邦では自験例もふくめて調べた範囲では25例²⁻²⁴⁾と稀な疾患である。

Oberling は脂質顆粒を胞体内に含む組織球由来の泡沫細胞 (foam cell) の腫瘍状増殖性病変を主体とし、線維芽細胞の増殖、形質細胞や巨細胞を含む炎症性細胞の浸潤、硬化巣の存在という組織学的特徴を持っており、成因は、局在性の炎症および脂質代謝障害によるもので真の腫瘍ではないと述べている。しかし、本症例において基礎疾患として糖尿病や免疫不全状態などの易感染性疾患はなく、原因を炎症とした場合の本症の発生機序は不明であった。また Kahn²⁵⁾ は、後腹膜黄色肉芽腫の悪性型として、組織球が多形成で細胞異型性や核分裂像があり、臓器転移を示すものを後腹膜黄色肉腫として報告している。

本邦25例を集計してみると、男女比11:14、年齢は16~75歳、平均50.3歳。また、調べた範囲で37例の外国例では、男女比18:19、年齢は2~84歳、平均46.8歳であり本邦例および外国例ともに男女差はなく発症年齢としては40歳代が最も多い。また外国例では10歳未満の発症例が5例²⁵⁻²⁷⁾認められているが本邦においてはこの年代での発症は認められていない。

主訴として最も多いのは疼痛 (12例) であり、つぎに腫瘤触知 (10例)、発熱 (4例)、他に血尿、頻尿、全身倦怠感、腹部膨満感、下肢腫脹などが認められた。発生部位としては腎周囲が半数以上を占め、その他小骨盤腔、回盲部、横行結腸周囲、膀胱周囲等である。左右比は9:15であり若干右側に多い様である。腫瘤の大きさは径1cm程度のもから腎の約2倍近くあったものまでさまざまである。腫瘤は腸腰筋、腎、腹膜等との癒着が強くみられ、癒着のないものは3例にすぎなかった。また、癒着例の腫瘤完全摘出率は60%であり、このうち右側例は69%、左側例は43%であり右側例に比べ左側例の摘出率が低い様である。また、左側例において可及的切除に終わった症例はすべて腸腰筋との癒着が認められている。腫瘤は肉眼的に黄色~黄褐色を呈し、内部は嚢胞状で黄色調の液体貯留が認められるものが多く、空洞を形成したのもも認められている。

治療は腫瘤の完全摘出が理想であるが、完全摘出例でも再発死亡の報告²⁸⁾もあり、Oberling は腫瘤切除に加え放射線照射の必要性を述べている。また、Ozarda²⁸⁾ は生検のみの症例に対して放射線照射し腫

瘤の著明縮小例を報告しているが、本邦においては放射線照射された症例がないため効果判定はできていない。

予後については本邦では長期観察例の報告がないため経過は不明である。Shih²⁹⁾ は単一臓器の Xanthogranuloma は良性、多臓器の Xanthogranulomatosis は致死的と述べている。本邦では後者は剖検例の1例³⁰⁾が報告されているのみである。また、Kahn は後腹膜黄色肉芽腫の死亡例を報告しているため、良性・悪性の判断は困難であり、今後本症例においても厳重な経過観察が必要であると思われる。ただ、本症例においては follow up CT にて残存腫瘍は自然に縮小しつつあり、こういう経過をたどる症例もあることは、本症の病因がはっきりしない現在興味深いと思われる。

結 語

48歳男性の右腎内側から下大静脈にわたり発生した後腹膜黄色肉芽腫の1例を若干の文献的考察を加えて報告した。本症例は現在のところ本邦25例目と思われるが、腫瘍の自然縮小傾向がある点で興味深い1例と思われる。

本論文の要旨は第62回九州泌尿器科懇話会において発表した。

文 献

- 1) Oberling C: Retroperitoneal xanthogranuloma. *Am J Cancer* **23**: 477-488, 1935
- 2) 天野拓哉, 尾本徹男: Retroperitoneal Xanthogranuloma の1例. *西日泌尿* **35**: 533-538, 1973
- 3) 湯本東吉: 線維性組織球腫について. *臨整外* **8**: 698-713, 1973
- 4) 伊香雅文, 福田義人, 福本 進, ほか: 回盲部に生じた黄色肉芽腫の1例. *南大阪病医誌* **22**: 145-149, 1974
- 5) 加野資典, 中山 宏, 岩崎 宏: 後腹膜黄色肉芽腫 (Retroperitoneal Xanthogranuloma) の1例. *臨泌* **29**: 455-459, 1975
- 6) 池田 稔, 松尾栄之進, 近藤 厚: Retroperitoneal xanthogranuloma の2例. *日外会誌* **77**: 1100, 1976
- 7) 友吉唯夫, 澤西謙次: 後腹膜黄色肉芽腫の1例. *泌尿紀要* **22**: 447-451, 1976
- 8) 崎元哲郎, 武井信介, 木村正治, ほか: 大腸周囲に発生した黄色肉芽腫の1例. *日内会誌* **66**: 569, 1977
- 9) 森本 修, 黄河 清, 福本 進, ほか: 後腹膜黄色肉芽腫 (Retroperitoneal xanthogranuloma) の1例並びに本邦例集計. *南大阪病医誌* **28**: 51-57, 1980
- 10) 井口厚司, 中州 肇, 八木弘朗, ほか: 後腹膜黄色肉芽腫の経験. *西日泌尿* **42**: 929, 1980
- 11) 後藤百萬, 鈴木 靖夫, 三宅弘治: 後腹膜黄色肉芽腫および子宮内膜症性卵巣嚢腫に合併した水腎症の1例. *臨泌* **35**: 681-684, 1981
- 12) 金子 正, 山下 憲一: 腎周囲に発生し、結腸壁にも浸潤を伴った後腹膜黄色肉芽腫の1例. *公立学校共済組合近畿中央病院研究業績集* **3**: 181-189, 1981
- 13) 近藤清治, 服部文雄, 山下善寛, ほか: 後腹膜黄色肉芽腫の1例. *静岡総合病医誌* **1**: 37-42, 1985
- 14) 八代直文: 後腹膜腔. *綜合臨* **34**: 2136-2139, 1985
- 15) 和気義徳, 金田文輝, 今 達, ほか: 興味ある経過を示した後腹膜 Xanthogranuloma の1例. *日臨外医会誌* **47**: 1136, 1986
- 16) 笠野泰生, 小西隆蔵, 三島秀雄, ほか: 後腹膜黄色肉芽腫の1例. *和歌山医* **38**: 513-520, 1987
- 17) 川端規弘, 大江成博, 辻 寧重, ほか: Retroperitoneal xanthogranuloma の1例. *室蘭製鉄病医誌* **26**: 97, 1988
- 18) 武山 聡, 坂本 尚, 羽賀将術, ほか: 後腹膜 Xanthogranuloma の1例および当院における後腹膜腫瘍17例の統計的考察. *北外誌* **33**: 47-50, 1988
- 19) 棚瀬嘉宏, 岩井省三, 川喜多順二, ほか: 後腹膜黄色肉芽腫の1例. *臨泌* **43**: 603-605, 1989
- 20) 古田雅也, 杉山純夫, 鈴木良彦, ほか: Perineal space に発生した黄色肉芽腫の1例. *日医放線会誌* **49**: 789, 1989
- 21) 金丸 洋: 後腹膜黄色肉芽腫の1例. *臨外* **45**: 1915-1918, 1990
- 22) 斎藤文志郎, 高松恒夫, 中西正一郎, ほか: 腎癌との鑑別が困難であった後腹膜黄色肉芽腫の1例. *癌の臨* **37**: 889-892, 1991
- 23) 鈴木和浩, 三浦尚人, 榎田 健, ほか: 後腹膜黄色肉芽腫の1例. *泌尿紀要* **38**: 315-318, 1992
- 24) 仲川嘉紀, 吉井将人, 吉田宏二郎, ほか: 後腹膜黄色肉芽腫の1例. *臨泌* **47**: 410-413, 1993
- 25) Kahn LB: Retroperitoneal xanthogranuloma and xanthosarcoma (malignant fibrous xanthoma). *Cancer* **31**: 411-422, 1973
- 26) Bissada NK and Fried FA: Retroperitoneal xanthogranuloma case report and review of the literature. *J Urol* **110**: 354-356, 1973
- 27) Cleto C, Bruno DB, Michele G, et al.: Retroperitoneal fibrohistiocytic tumors in children. Report of five cases. *Cancer* **42**: 1350-1363, 1978
- 28) Ozarda AT and Naifeh G: Retroperitoneal xanthogranulomas. Case report of favorable response following irradiation. *Cancer* **26**: 1109-1111, 1970
- 29) Shih CC: Xanthogranulomatosis. *Taiwan I Hui Tsa Chih* **77**: 919-983, 1978

- 30) 渡辺照男：黄色肉芽腫症の1剖検例. 医のあゆみ
64：210, 1968

(Received on October 25, 1993)
(Accepted on December 16, 1993)